

「ソーシャルワーク」とイスラーム

アジアにおけるプロフェッショナル・ソーシャルワークとの宗教の対話に向けて

研究代表者 藤岡孝志

(執筆者 共同研究員 松尾加奈)

はじめに

2014 年に採択されたソーシャルワーク専門職のグローバル定義以降、土地固有の知(Indigenous Knowledges)、多様性(diversity)やクライアントの民族的背景への配慮が重要視されている。さらにアジア太平洋圏域では特に宗教を重視することを、この圏域のソーシャルワーク定義に付加している(APASWE, 2016)。世界的な傾向を見ても、政治不安や国内での武力紛争等により西側諸国に支援を求めるシリア難民、先行き不透明な経済不安の母国から脱出し安定した生活を求める難民たちに代表されるようなムスリム難民の数が爆発的に増えており(UHCR, 2017)、最大の受け入れ先である EU 各国の対応に追われ、国内/国外の結束を揺るがす事態となっている。このような背景の中でソーシャルワーク実践議論の世界的な傾向として、クラブツリー(Crabtree, Husain, & Spalek, 2014)やラガーブ(Ragab, 2016)のようにクライアントの持つイスラームの視点を重視しながらどのように既存のコミュニティが受け止め、彼ら・彼女の生活を新しいコミュニティに定着させるかということが主題となっている。

本研究は国境・民族・宗教を超えた「ソーシャルワーク」と、そのアプローチについて問い直すことを目的としている。世界の動き、国境を超えたソーシャルワークの動きの中で、コミュニティの住人が他人の宗教に積極的に関与しない日本がムスリムの研究者とイスラームが実施している「ソーシャルワーク」実践に焦点を当てた研究をすることは意義があると考えている。

2つの質問

日本社会事業大学が 2015 年以降実施してきたイスラームの「ソーシャルワーク」活動に関する国際共同研究事業では、モスクや聖職者が行っている実践について問う以下の 2 つの質問から出発した。なお本稿では敢えて引用符をつけて「ソーシャルワーク」と記している。これは現代日本で展開されているような専門職によるソーシャルワーク（社会福祉）実践ではなく、ボランティアベースで実践されている慈善活動でかつソーシャルワーク実践を補完するような実践活動を収集するためである。

2つの質問については以下の通り：

- 1) イスラームの宗教施設・聖職者は「ソーシャルワーク」活動を実施しているのか。
- 2) 実施している場合、どのような活動が各国で展開されているのか。

本年度は上記の質問を踏まえた上で、調査項目をさらに3点に絞ってデータを収集し、イスラームが実施している「ソーシャルワーク」についてより具体的なフレームワークを導き出そうとした。

目的

平成28年度の本研究目的は、財政、「ソーシャルワーク」実践（例えば介護、難民支援、子ども家庭支援など）、大学レベルのソーシャルワークカリキュラムの3点に絞り、以下のデータを収集することとした。

方法

平成27年度国際共同研究「宗教とソーシャルワーク」の調査研究結果を踏まえ、本研究は財政・ソーシャルワーク実践事例・ソーシャルワーク教育カリキュラムという3点に焦点を絞り、イスラームとソーシャルワークの関連性について調査を実施した。対象国はムスリムが多いバングラデシュ・インドネシア、及び仏教徒が多い中においてムスリム地域を構成しているタイとした。日本チーム(代表：藤岡教授)が策定したガイドラインに沿って各国の研究協力者が調査を実施した。参加者は第50回環太平洋福祉セミナーの初日セッションにおいて「イスラミック・“ソーシャルワーク”はどのように活動してきたか」と題し、淑徳大学アジア国際社会福祉研究所と共催により2016年12月10日に中間報告を実施した。

調査期間

2016年4月—2016年1月

調査協力者氏名

バングラデシュ：ハビバー・ラアマン(Mr. Habibur Rahman)

インドネシア：アディ・ファフルディン(Dr. Adi Fahrudin)

タイ：ワンワディ・ポンポクシン(Ms. Wanwadee Poonpokin)

仮説

アジアにおけるソーシャルワーク教育の国際化と現地化に関する研究(2013;2014)から、西欧で生まれたソーシャルワーク専門職養成教育の理論と実践はアジアのムスリム諸国の実社会において摩擦を生じている可能性が示唆された。また現在主流となっているソーシャルワーク教育がアジア諸国の人びとのライフスタイルと価値観とズレが生じているという主張が見られた。さらにムスリムによるソーシャルワーク実践に関する研究(2016)から、イスラームにおける“ソーシャルワーク”活動は恵まれない人々を支援するために相互支援とザカート（定められた喜捨）制度の体系的な運営が含まれていることが報告された。これらはコーランとハディースで定められている基本的なイスラームの原理である。このザカート制度とイスラームの定める相互支援は、西欧ルーツのソーシャルワーク専門職の活動と同じ側面を持っており、イスラームの宗教機能に根ざした活動は地域社会（コミュニティ）メンバー全てを対象としている。そこで本研究ではより具体的

なテーマとして、イスラーム固有の「ソーシャルワーク」活動が、ユダヤ教・キリスト教に根ざしたメインストリームのソーシャルワークとどのように違うのかを以下の項目に絞って測ることとした。

1) イスラームの価値観、信念、機能; (2) コーランおよび/またはハディースにおける概念、(3) 実施方法、(4) 主たる誰によってどのように実施されているか。

所見

ザカートは言うまでもなくイスラーム信仰の5つの柱の一つであり、国家が収集する税金や政府の社会保障制度と大きく異なる。ラアマンの報告によると、バングラデシュのナショナル・ザカート・ボードは同国のソーシャル・サービス部門と同様のサービスを提供しているが、その範囲は限られている。ザカートの資金はナショナル・ザカート・ボードだけではなくムスリム個人によっても収集され分配される。またザカートが全体のどの程度に分配されているのか正確な数字は入手できなかった。

またポンポクシンは仏教徒の妻をもつムスリム男性によるドメスティック・バイオレンスのケースについて、ソーシャルワーカーのクライアントに対する姿勢や社会資源の活用について精密に報告をしている。彼女の報告によると虐待者の家族歴、ムスリムであることゆえの地域コミュニティからの孤立、虐待者と被虐待者の教育歴の違い等が虐待者を追い詰め、ドメスティック・バイオレンスと息子への児童虐待を深刻化していることが分かった。この虐待者の分析と子どもの権利に関するイスラームの見解は西欧圏のソーシャルワーク専門職が学ぶ内容が類似していることが分かった。

インドネシアのソーシャルワークカリキュラムを報告したファハリディンは、イスラームの教えに基づくソーシャルワークのカリキュラムは西欧圏のあるソーシャルワークと並行して教えられるべきだと主張した。インドネシアの大学はそもそもソーシャルワークを教える設備(教科書・参考文献)がないと指摘する。この「適切な教材の欠如」というのはソーシャルワーク教育の国際化の研究報告にも各国から提示された点である。

結論

本研究では、①イスラームの教義の柱(ザカート)と国家の関係、②地域社会における宗教的マイノリティとソーシャルワーク、③イスラームの視点からのソーシャルワーク専門職養成カリキュラムの作成の困難さがそれぞれ報告された。ムスリムが人口の主流を占める国々においては、日本のように政教分離がなされていない。またムスリムは日常生活と信仰を切り離したりしない。そのためソーシャルワークは人びとの信仰生活を十二分に考慮する必要があるのは言うまでもない。しかし、このようなソーシャルワークのアプローチはムスリムであろうとなかろうと考慮されなければならない原則である。

また本報告書の中でも、現代主流である西欧圏のソーシャルワーク(=ユダヤ・キリスト教が大きな影響を与えているソーシャルワーク)教育が、イスラームが主流の国々において理論と実践の摩擦の中で展開されている可能性が示唆された。一方で西欧圏のソーシャルワークとイスラームの教えに基づくソーシャルワーク実践の類似点も多く見出すことができた。

当研究所が過去に実施した国際共同研究事業(ソーシャルワーク教育の国際化、現地化の歴史およびソーシャルワーク教育連盟の地域組織化に関する研究)で導き出した「世界のソーシャルワークの主流である西欧圏の専門職ソーシャルワークはイスラームの人びとの生活実情に必ずしも合致しているわけではない」という仮説的結論について、政教分離

が進む主流派ソーシャルワークの視点が人びとの生活と宗教が密接に絡み合い不可分であるイスラム教徒の視点と異なることがその原因のひとつである可能性が見出された。一方でソーシャルワーク教育においては専門職によるソーシャルワーク教育を志向する報告者たちにより主流派ソーシャルワークへの親和性が強く、「イスラームか西欧か」という二項対立によるソーシャルワーク議論が無為であるという新たな仮説も見出された。

本年度の研究を通じ、様々な文化的・宗教的・民族的背景を持つ人々が「ソーシャルワーク」と呼称する行為とは何か、(西欧ルーツの) 主流派ソーシャルワークと異なる点・思想を明らかにするため調査研究を通じた対話の必要性が示唆された。

本研究の最終報告書を作成中にアフリカ・ザンビアで開催されたソーシャルワーク教育開発会議(2017年6月25-28日)において研究報告発表がなされたが、西欧ルーツのソーシャルワークがなぜムスリムに受け入れがたいのか、との質問が寄せられた。また、宗教とソーシャルワークの関係性、インディジナスと宗教の捉え方へのアジアから発信された本報告について興味を持つ参加者が多かったことを付記しておきたい。現代主流である「ソーシャルワーク専門職」の定義を超え、「ソーシャルワークとは何か」と今後とも問い続けていくことは意義ある研究と考える。

APASWE. (2016). Joint Amplification of the Global Definition on Social Work Profession in Asia and Pacific.

Retrieved from

<http://www.apaswe.com/index.php/news-event/159-check-it-out-apaswe-no-12-2015-2017>

Crabtree, S. A., Husain, F., & Spalek, B. (2014). *Islam and social work: debating values, transforming practice*: Policy Press.

Ragab, I. A. (2016). The Islamic perspective on social work: A conceptual framework. *International Social Work*, 59(3), 325-342. doi:10.1177/0020872815627120

UNHCR. (2017). UNHCR Europe Situation. Retrieved from <http://www.unhcr.org/europe-emergency.html>